

国立能楽堂公開講座

平成30年度上半期の公開講座は、国立能楽堂自主公演等に関連した下記のテーマで開催します。皆様のご応募をお待ちしております。

※開始時間をご確認の上、ご応募くださいますようお願い申し上げます。

4月20日(金)午後3時～

西行の能

講師＝小林 健二 (国文学研究資料館副館長)

※応募締切 3月30日(金)必着

5月23日(水)午後2時～

狂言の歴史と現在、将来

講師＝羽田 昶 (武蔵野大学客員教授)

※応募締切 5月7日(月)必着

6月28日(木)午後2時～

越路の能楽

講師＝佐々木 香織 (能楽研究家・石川工業高等専門学校准教授) ※応募締切 6月7日(木)必着

7月11日(水)午後2時～

国立能楽堂開場35周年記念 公演記録映像でふりかえる 能

講師＝金子 直樹 (能楽評論家)

※応募締切 6月20日(水)必着

8月23日(木)午後2時～

国立能楽堂開場35周年記念 公演記録映像でふりかえる 狂言

講師＝羽田 昶 (武蔵野大学客員教授)

※応募締切 8月2日(木)必着

9月12日(水)午後2時～

国立能楽堂開場35周年記念 公演記録映像でふりかえる 復曲・新作

講師＝小田 幸子 (能楽研究家)

※応募締切 8月22日(水)必着

◆受講無料 ◆場所＝国立能楽堂大講義室 ◆定員＝160名

◆応募方法＝1講座につき、お一人様1枚の往復はがきでお申し込み下さい。

昨年6月から郵便料金が値上げになっております。郵便料金にご注意ください。

往復はがきの往信面に ①郵便番号 ②住所 ③氏名 ④連絡先電話番号 ⑤講座の日付 ⑥講座タイトル を
返信面に 郵便番号・住所・氏名 を明記の上

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷4-18-1 国立能楽堂「公開講座」係 へお送りください。

※お寄せいただいた個人情報については厳重に保管し、本講座に関する連絡以外の目的では一切使用致しません。

◇応募者多数の場合は抽選になります。あらかじめご了承ください。

締切を過ぎて到着したはがきは、抽選の対象とすることができませんので、余裕を持ってご投函下さい。

◇内容等に変更が生じる場合があります。あらかじめご了承ください。

公開講座の日程等は、国立能楽堂プログラム・日本芸術文化振興会ニュース
・ホームページでもご確認いただけます。

◇駐車場はございませんので、車でのご来場はご遠慮下さい。

◇問合せ先 国立能楽堂事業推進課調査資料係

TEL 03-3423-1331(代)



国立能楽堂

狂言の成立と発生

1 『万葉集』(600~800)

「あづきなく 何の狂言 今更に わらはごとする 老人にして」(二五八二)

「大君の 御命畏み 秋津島 倭を過ぎて 大伴の 御津の浜辺ゆ 大船に 真楫しじ貫き
朝風に 水手の声しつ つ 夕風に 楫の音しつ つ 行きし君 何時来まさむと 卜置きて 齋
ひ渡るに 狂言や 人の言ひつる わが心 筑紫の山の 黄葉の 散り過ぎにきと 君が正香
を」(三三三三三三)

「狂言や 人の言ひつる 玉の緒の 長くと君は 言ひてしものを」(三三三四)

2 『白氏文集』中の「狂言綺語」——『和漢朗詠集』(1011~1012(寛弘元)~1012(長和元))

「願はくは今生世俗の文字の業、狂言綺語の誤りを以て、翻して当来世世讚仏乗の因、転法輪の縁とせむ」

3 藤原明衡(989?~1066) 『新猿楽記』

「予、廿余年より以還、東西二京を歴観るに、今夜猿楽見物計の見事は、古今に於きていまだ有らず。就中に呪師・侏儒舞・田楽・傀儡子・唐術・品玉・輪鼓・八玉・独相撲・独双六・無骨・有骨、延動大領が腰支・蛭漉舎人が足仕、氷上専当が取袴・山城大御が指扇、琵琶法師が物語・千秋万歳が酒禱、飽腹鼓の胸骨・蠟娘舞の頸筋、福広聖が袈裟求め・妙高尼が襠褌乞ひ、形勾当が面現・早職事が皮笛、目舞の翁姿・巫遊の気粧貌、京童の虚左札・東人の初京上り、いはむや拍子男共の気色・事取大徳が形勢、都て猿楽の態、烏漕の詞は、腸を断ち顎を解かずといふことなきなり」

4 『古今著聞集』(一二五四年(建長六))卷第十六「興言利口篇」説話総数七十二話

「興言利口は、放遊境を得るの時、談話に虚言を成し、当座殊に笑ひを取り、耳を驚かすこと有るものなり」

5 丹後国分寺金堂供養試案 延年(二三三四(建武元) 四月八日)

「一番 連事 義浄房 二番 咲 覚空房 寂乘房 楽順房 三番 連事 楽順房」

6 『法隆寺祈雨旧記』(一二四〇(暦応三) 八月十二日) 「雨悦の延年」

「開口 覚寂房木ノ延年秀句也。竜田川ノ水上ヲ尋タル連詞也。若音ハ金剛殿。風流ハ崑崙ヲ尋テ八仙ニアウタル事。竜王八大河ノ事。マヘ〜カタツフリト云フ事。」

7 『周防国仁平寺本堂供養日記』(一二五二(観応三) 三月十六日)

「十一番狂言 山伏説法 人数別紙有之」

8 「迎陽記」(一三九九年(応永六)五月二十五日)

「狂言、猿楽、数反(へん)能を尽くし了んぬ」

9 『看聞日記』(一四二四年(応永三一)三月一日)

晴。猿楽昨日ノ如シ。畠山小弼見物ノ為ニ来タル。猿楽ノ児有リ。件ノ児ヲ小弼最愛スト云々。猿楽了ンヌ、小弼児ヲ同道シテ帰リヌ。松原ニ於テ酒盛有リ云々。三木張行スト也。抑モ猿楽狂言公家人疲労ノ事、種々狂言セシムト云々。此ノ事然ル可カラズノ間、田向たむきせんけい禪啓ヲ以テ楽頭ヲ召シ突鼻ス。当所ハ皇居也。公家居住ノ在所ニテ公家疲労ノ事種々狂言スルハ故実之条存ゼズ尾籠ノ至也。向後ノ為突鼻ス。且ツ山門ニ於テ傍例有リ。猿楽猿ノ事ヲ狂言セシム。仍ツテ山法師猿楽ニ刃傷セシムト云々。又仁和寺ニ於テ猿楽狂言聖道法師比興ノ事共ヲ狂言セシメ、御室ヨリ罪科ヲ被ルト云々。此ノ如ク皆在所ニ就テ斟酌有リ。故実ヲ存ゼヌノ条奇恠也。楽頭ヲ召シ放スベキ之由勘発シ了ンヌ。仍テ楽頭更ニ存知セザル之由種々陳謝申。比興也。

10 世阿弥『習道書』(一四三〇年(永享二))

「狂言の役人のこと。是又、をかしの手だて、あるひはざしきしく、又は、昔物語などの一興あることを本木に取りなして事をする、斯くの如し。又、信の能の道やりをなすこと、笑はせんと思ふ宛てがひはあるべからず。ただ、その理を弁じて、嚴重の道理を一座に言ひ聞かするを以て道とす。抑も、をかしといつば、必ず数人の笑ひどめくこと、職なる風体なるべし。笑みの内に楽しみを含むと云ふ。是は面白く嬉しき感心也。この心に和合して、見所人の笑みをなし、一興を催さば、面白く、幽玄の上類のをかしなるべし。これ、をかしの上手と云へり。昔の槌太夫が狂言、この位風なりし也。それに付ても、数人哀憐のしほを持ちたらん生得は、芸人の冥加なるべし。言葉・風体にも、職なる事をなさずして、貴所・上方様の御耳に近からん利口・狂談をたしなむべし。返す返す、をかしなければとて、さのみに卑しき言葉・風体、ゆめゆめあるべからず。心得べし」

一、申楽の番数の事。昔は四五番に過ぎず。今も、神事・勧進等には、信の能の申楽三番、狂言二番、已上五番也。近年、貴所様にて仕事は、ことの外に番数を尽くして、七八番・十番など貴命にて仕る事、私ならず」。

11 醍醐寺座主満済の日記『満済准后日記』(一四三二年(永享三)二月二十一日)

「脇能の時分より降雨。狂言の間に又雨脚止み了んぬ。仍て舞台を拭ひて一番又之を仕る」

12 京都糾河原勸進猿楽(一四六四年(寛正五)四月五日・七日・十日)所演の狂言

「鞍猿・蚊相撲・入間川・髭櫓・伊文字・業平餅・節分・朝比奈・若和布・磁石」他

【末廣がり】 今の「末廣がり」(上卷所收)

末ひろがり

(一)「誰(たら)す」から出た名詞。だます者。盜賊、すり、詐欺師。今の狂言の「すつば」に當る。
(二)「せう」は「しう」の誤記。
(三)今の「シヤギリ留め」であらう。シヤギリは、目出たく賑やかな気分を現す笛の節の一種。

一、大明出^名て人をよび出^呼す。都へ行て、いかにもたかひ末ひろがりかふてこよとゆふ。さてのぼる。都につきてよばわる。〽たらし一人出て、さし笠をうる。もしせうはら立ば、はやし物。〽御笠山〽、人が笠をさすならば、我も笠をささうよ。とおしゆる。くだる。しうこれ見てはらをたつる。おつばしらかす。其時はやし物。しううかる。もろともにおどる。ふへとめ。

【靉猿】 今の「靉猿」(上卷所收)と大體同じ。猿歌の事などは記載を省略したものかと思はれる。

うつほ猿

(一)「何か」「何ぞ」などの助辭を書落したものであらう。
(二)猿の踊りに感心して。
(三)今は太郎冠者に引かれる事なく、猿歌があつて「目出たけれ」と斷ひ留めになる。

一、大明出^名て、太郎冠^者者呼^呼び出^出す。今日は鹿^猿がりに行、仕^度申せ。さてかりに出る。何^一いき物がな、門出^祝いわはんとゆふ。こゝに申^猿引^曳来る。それころせとゆふ。猿^背のせを斗^はてうつほにくらぶる。猿^泣引^泣なく。これを見てふびんとゆふて殿^泣もなく。さてかたな小袖^取とらする。後猿^{太郎冠}になりて、たらくわじやに引^引る。

【棒縛り】 今の「棒縛り」

ばふしばり

(一)「ぬすんで」「ん」を書落したのであらう。
(二)「せう」は「しう」の誤記。
(三)「けでん」の訛りであらう。驚きあきれる。
(四)以下の語は謡曲「松風」の文句をもちる。

一、殿出^呼て二人よび出^出し、遊山^{留守}に行^置とるすにおくが、酒ぬすむとて、一人はばふしばり、一人はうしろ手にし^縛はる。獨^盃さかづきをふところに入^懐てもつ。酒ぬすでのむ。たがいに舞^主。せうこれを見る。せうの影の酒にうつ^映つたを見つ^主けてけん^怪でんする。まことによふたとゆふて、〽せうは獨^主、〽影は〽ふたり、〽三^主せうの、夜の車にせうをのせて、うしともおもわぬおせうかなや。せう^主刀^拔かたなぬひておふ。に^逃ぐる。と^留め。

【附子砂糖】今の「附子」(上巻所收)

附子砂糖
ぶすさたう

- (一)鳥冠より製したる毒薬。「ぶ」は原本に濁點がある。
- (二)繪畫に贊詞を書添へたもの。床間にあつた掛け物であらう。
- (三)天目茶碗。
- (四)ここからフシになる。
- (五)「せ」は小字で書入れてある。
- (六)かけ聲をかけ、拍子を踏んで留める留め方。今は「やるまいぞく」になる。

一、ぼう主一人出て、二人よび出す。よ所へ行とてるすにおく。おくの間に附子がある。あけて見てしするなとゆふ。もつともとてゐる。二人の者ふしんして見る。さたうをみなくう。さてゑさん天目打かふす。なひてゐる。ぼう主来て、これを見てたづぬる。せれふ。一口くへどもしなれもせず、二口くへどもしなれもせず、三口四口五口六口、十口斗ねぶりくへども、しなれぬ事こそ目出けれ。ひやうしとめ。

【八幡舞】今の「八幡前」(中巻所收)と大體同じ。今は舞入りでなく、舞運びに應募する形式。

八はたむ子

- (一)「せうと」は「しうと」の誤記。舅を本畫では大半「せうと」と書いてある。舅入りは婚約後新夫が始めて妻の實家に招かれ意の舞入りと同じらしい。
- (二)「しゆ」は「しよ」の誤記。
- (三)原本「鳥」の右に「かめ」と振假名がある。鳥と言ふべきを龜と言誤る事を示したのであらう。

一、一人出て、せうと入せんとて、いろくしつけをならふ。又一人出て歌をおしへる。さてせうと入して酒のむ。せうとむこに弓をしゆまふする。とり居に鳥のみたるをいさせる。歌をもしゆまふする。いか斗神もうれしとおぼすらん、鳥い立けり。ひやうしとめ。

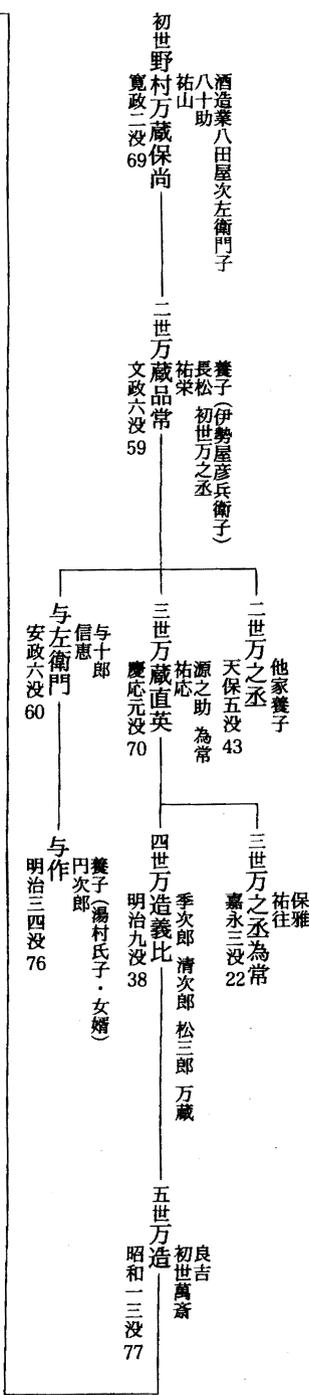
【面研ぎ】現存しない曲。

面研
つらとぎ

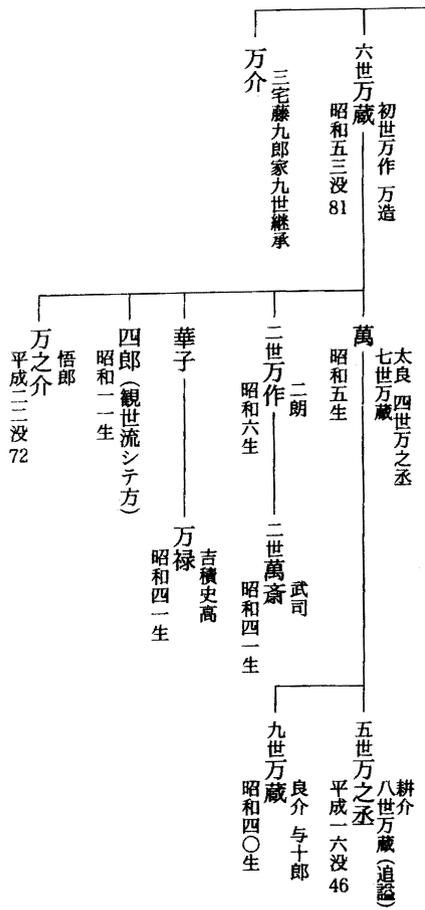
(一)「」は衍字であらう。

一、たふ人一人出て、かみとがふとよばはる。男一人出て、かみ見は無い、人のかほなどはとがぬかとゆふ。なかくとくとゆふ。さてめこをつれてくる。あをにころばす。おつかかつてとぐ。おこしてつより水をかける。

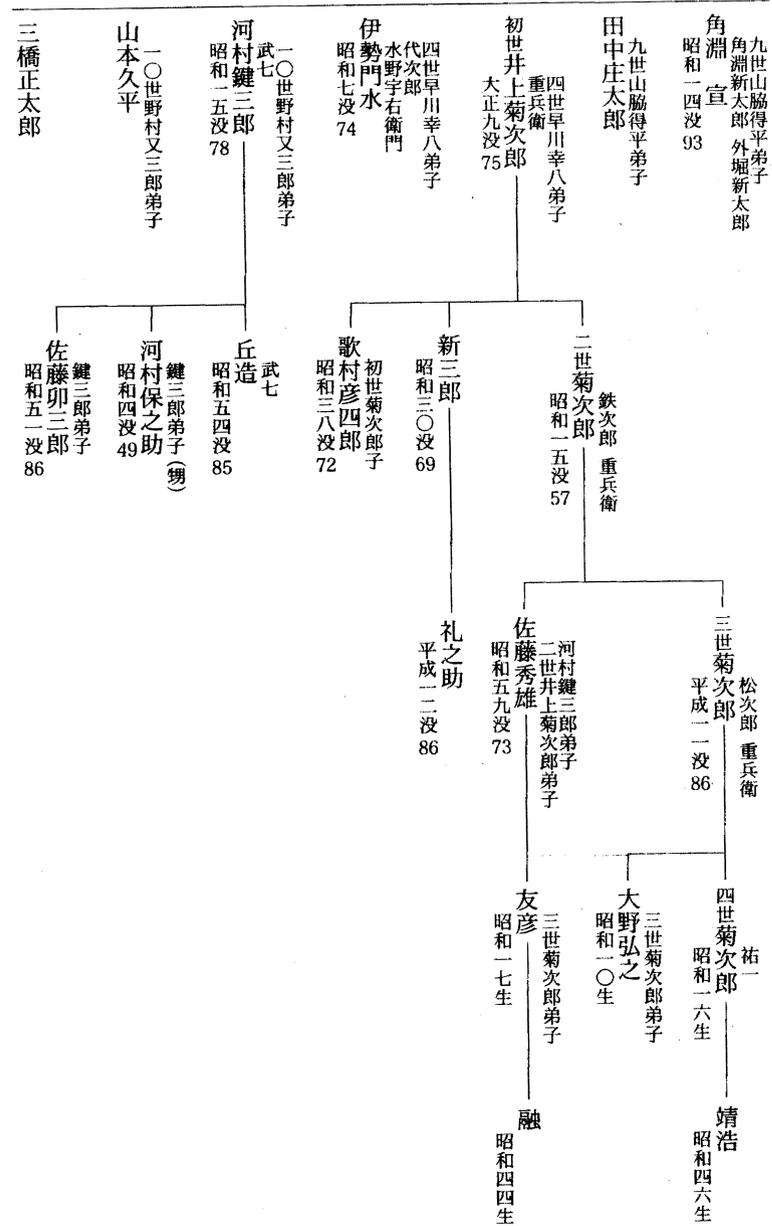
【野村万藏家】



【狂言共同社】



同人
(明治二四結成)



第二次大戦後の狂言界の動き

昭和二二 十一月、野村太良(現、萬)の勉強会「冠者会」発足。

二四 和泉会発足。野村万蔵「腰折」・三宅藤九郎「金岡」・和泉保之「武悪」「二人袴」。

二月五日、二世茂山千作没。

十月、野村太良は万之丞を襲名「釣狐」を、二郎は万作を襲名「三番叟」「奈須与市語」を披く。

二六 六月、能楽ルネッサンスの会第二回公演に三宅藤九郎作「さとりの仙人」。

二八 六月、第十回冠者会で山本東次郎・野村万蔵・万作共演の「武悪」。

七月、飯沢匡「濯ぎ川」初演(武智鉄二演出、茂山七五三・千之丞・千五郎)。大蔵会発足。

二九 (能・狂言の様式による創作劇の夕)。武智鉄二演出で木下順二「夕鶴」(片山博太郎・茂山千之丞・野村万之丞・万作)、岩田豊雄「東は東」(茂山七五三・千之丞・万代峰子・木村明)

三〇 一月、野村兄弟の勉強会(「狂言あとりえ」)発足。

三月、産経会館竣工祝賀会に和泉流「唐人相撲」。

五月、日本橋白木屋ホールで月例(白木狂言の会)発足。三八年六月まで九六回の公演を重ねる。このころジャーナリズムで「狂言ブーム」と言われる。

十月、木下順二「彦市ばなし」を狂言として初演。武智鉄二演出。彦市茂山千之丞・天狗の子野村万作・殿様茂山七五三。翌年、東京・冠者会で殿様を野村万之丞で再演。

十二月、武智鉄二、産経会館国際会議場で(円型劇場形式による創作劇の夕)制作・演出。アルベール・ジロー作詞、アーノルド・シェンベルク作曲のマイム「月に憑かれたピエロ」

(観世寿夫・野村万作・浜田よう子)、三島由紀夫「綾の鼓」(櫻間道雄・観世静夫・野村万之丞・茂山七五三・千之丞・長岡輝子・岸田今日子)。

三一 武智鉄二演出の(新作能・狂言発表会)。「仏陀と孫悟空」(野村万之丞・万作)、「智恵子抄」(観世寿夫・静夫・片山慶次郎・藤田大五郎・幸祥光・安福春雄・観世鍊之丞)

第十四回冠者会で深沢七郎原作・岡本克巳台本・岡倉志朗演出「檜山節考」(野村万作・万之丞・又三郎・悟郎・佐野平六・和田喜太郎・茂山千之丞ほか)。

十二月、日本能楽会(重要無形文化財保持者総合認定)発足。会員四〇名のうち、狂言方は茂山弥五郎・野村万蔵・山本東次郎・三宅藤九郎。

三四 七月二十九日、三世茂山忠三郎没。

三七 東京能楽鑑賞会で茂山弥五郎・野村万蔵共演の「武悪」。

三九 善竹弥五郎、重要無形文化財保持者各個指定(人間国宝)に認定される。
七月二十六日、三世山本東次郎没。

四〇 一月、野村狂言の会発足。十二月十七日、善竹弥五郎没。
二月 野村万蔵、重要無形文化財保持者各個指定(人間国宝)に認定される。

鎌仙会で「鷹姫」(横道萬里雄作・野村万之丞演出)、万之丞・万作・則寿(現東次郎)出演。

四五 演劇集団「真の会」(代表・観世寿夫)結成、万之丞・万作参加、「オイディプス」上演。

四七 野村万之介・山本則直・善竹十郎、「新の会」を発足させる。

四九 野村万蔵、日本芸術院会員となる。

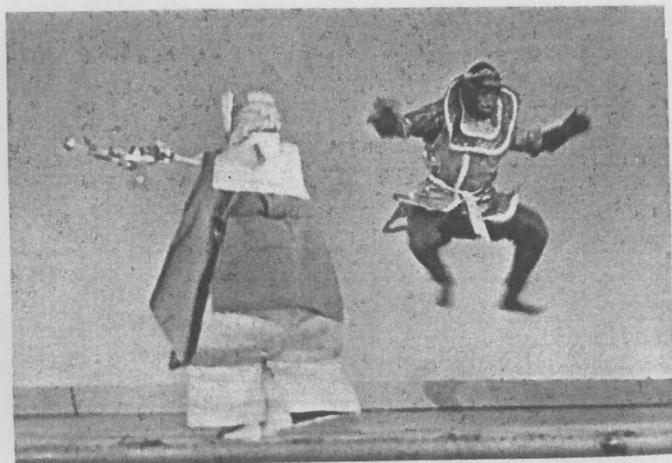
五一 茂山千作(三世)、重要無形文化財保持者各個指定(人間国宝)に認定される。

五三 五月六日、野村万蔵没。

五四 三宅藤九郎、重要無形文化財保持者各個指定(人間国宝)に認定される。

茂山千作(三世)、日本芸術院会員となる。

六一 七月十九日、茂山千作(三世)没。



⑥



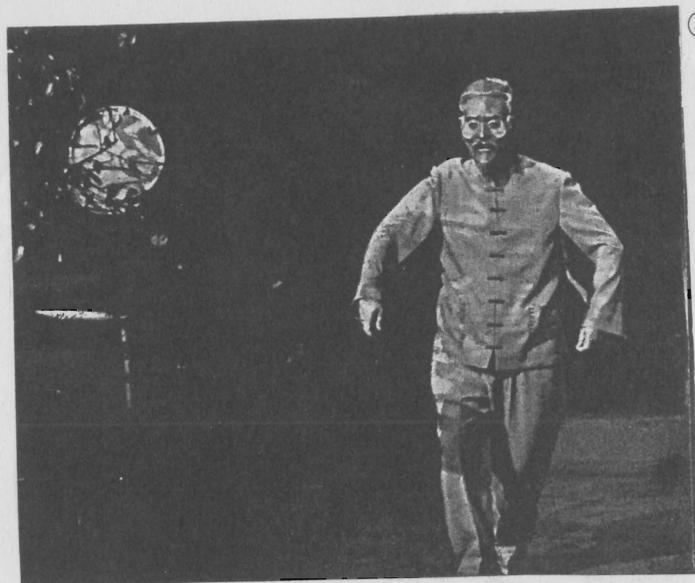
②



①



⑦



④



③



⑤

- ① 「夕鶴」 片山博太郎・茂山千之丞
- ② 「東は東」 茂山七五三・千之丞・万代峰子
- ③ 「月に憑かれたピエロ」 野村万作・浜田洋子
- ④ 「綾の鼓」 櫻間道雄
- ⑤ 「綾の鼓」 茂山千之丞・野村万之丞・茂山七五三
- ⑥ 「仏陀と孫悟空」 茂山千之丞・野村万作
- ⑦ 「智恵子抄」 観世寿夫・静夫